

宇宙に抱かれて

壮大な宇宙から見れば、地球も小さな点の一つに過ぎない。プラネタリウムには、そんな思いを抱かせる力がある。世界的プラネタリウム・クリエイター大平貴之氏の思いを聞いた。

小学生でプラネタリウムを自作
頭上を覆うドーム状の天井いっぱい、無数の星々がきらめく。プラネタリウムは、大人から子どもまでそれぞれに日常の喧騒を忘れる癒しと、宇宙への憧れを与えてくれる。

大平貴之さんは、プラネタリウムを創る人、プラネタリウム・クリエイターだ。投影機の開発にはじまり、設置や投影に関するレクチャー、さらに星空の空間演出も手掛ける。これまで手掛けたプラネタリウムは国内外で40を超え、体験した人の口コミで評判が広がり、商

業施設をはじめ業種、建物を問わず投影を望む声が後を絶たない。大平さんが初めてプラネタリウムに出会ったのは小学生の頃。地元の川崎市青少年科学館(現・かわさき宙と緑の科学館)で、「富士山山頂からの星空」を鑑賞した。

「立体的に投影される映像空間にぐいぐい引き込まれてしまいました。本や勉強で得た数字だけの知識とは違って、星が無数にあるということを感じてきて感動しましたね」
当時、大平さんはモノづくりや科学実験が大好きで、学校の図書室にあっ

大平 貴之 (おおひら たかゆき)

プラネタリウム・クリエイター。有限会社大平技研代表取締役。1996年日本大学大学院理工学研究科精密機械工学専攻を修了後、大手メーカーに入社。2005年有限会社大平技研を設立し、代表に就任。2005年日本イノベーター大賞優秀賞、2006年文部科学大臣表彰科学技術賞など受賞多数。著書に『プラネタリウムを作りました。— 7畳間で生まれた410万の星』(エクスナレッジ)、『プラネタリウム男』(講談社)など。前者はテレビドラマ化もされた。

た科学実験の本を読んで、片っ端から実験していたという。一時は親から「実験禁止令」が出されるほどのめり込みよう。そんな大平さんがプラネタリウム鑑賞をきっかけにプラネタリウム製作に興味を持つのは必然だった。思うが早いか、すぐに材料を集め、小学4年生で卓上のピンホール式プラネタリウムを完成させた。小さく星座をなぞって穴を開けた投影球に光源を入れると、部屋の天井に星空があらわれた。簡易な作りながらも上出来で、家族からも好評だったという。

「作れたことも嬉しかったですが、なによりも観た人が喜んでくれたのが嬉しかった。当時は意識していませんでしたが、人に披露することが一番の楽しみだったのかもしれない」
その後も大平さんは、次々とプラネタリウムを生みだしていった。開発の根底にはいつも、観客の心が震えるような感動を伝えたいという思いがあった。その情熱が一つの頂点に達したのは1998年。のちに大平さんの代名詞ともなる「MEGASTAR」の開発だ。半導体の微細加工に使われる技法を応用し、実に170万個もの星の投影に成功した。もっとも暗い星は11・5等級でも、はや着座位置から肉眼で確認することはできない。だが、そんな星々が無数に集まることで織りなす天の川の圧倒的な没入感、アートと呼ぶにふさわしい美しさだった。

「披露したい」から「喜んでもらいたい」へ
2000年、表参道の美術館を使った「MEGASTAR」の初公開は、そのアート性を生かしたものとされた。これまでのプラネタリウムの「定番だった星座や宇宙の歴史といった解説をなくし、かわりに波や風の環境音をBGMにするというスタイル。プラネタリウムの新市場を生み出そうとする大胆な挑戦だった。そんななかある現場スタッフがこう尋ねた。

「あのぼやーっと映っているのは何ですか？」
スタッフの指の先には天の川があった。大平さんははっと驚き、そのもやもやしたもののは天の川で、我々が住む銀河を内側から見たものだ」と構造を丁寧

「あのぼやーっと映っているのは何ですか？」
スタッフの指の先には天の川があった。大平さんははっと驚き、そのもやもやしたもののは天の川で、我々が住む銀河を内側から見たものだ」と構造を丁寧

「あのぼやーっと映っているのは何ですか？」
スタッフの指の先には天の川があった。大平さんははっと驚き、そのもやもやしたもののは天の川で、我々が住む銀河を内側から見たものだ」と構造を丁寧

「あのぼやーっと映っているのは何ですか？」
スタッフの指の先には天の川があった。大平さんははっと驚き、そのもやもやしたもののは天の川で、我々が住む銀河を内側から見たものだ」と構造を丁寧